公立世羅中央病院だより No.151

知っておきたい帯状疱疹

皮膚科　　柳田　のぞみ

【総論（原因）】

帯状疱疹は神経で休眠していた帯状疱疹ウイルスが再び目を覚ますことで発症する皮膚の病気です。神経に沿って痛みや発疹が帯状に出てくることにちなんで、「帯状」疱疹と呼ばれています。

帯状疱疹の原因は「みずぼうそう（水痘）」を引き起こすウイルスで、みずぼうそうにかかると、治った後でもウイルスは神経細胞に住み着いて休んでいます。加齢や過労、ストレス、病気で免疫力が下がると、潜んでいたウイルスが再び活性化して帯状疱疹を発症します。潜伏している神経を伝ってウイルスが皮膚の表面に出てくるため、まず神経が痛み、その後に赤い斑点、水膨れなどの発疹が体の片側に出てきます。

【症状】

始めにピリピリ、チクチク、ズキズキといった痛みが出て、数日遅れて痛みの部分に赤い斑点・水ぶくれが見られるようになります。全身どこにでも出ますが、体の片側にだけでることが特徴です。その後、水ぶくれが破れて浅い傷になりますが、１～２週間程度でかさぶたになって治ります。痛みは１か月ほど遅れて徐々に消えていきます。

帯状疱疹の皮膚症状が治った後でも、痛みや感覚の異常が長期間残ることがあります。長い人では数年単位におよぶこともあります（帯状疱疹後神経痛）。また、目や耳周囲の帯状疱疹、頭痛や嘔吐を伴うとき、発熱や全身に水ぶくれを伴う場合には、重症のサインであるため、早めに皮膚科を受診してください。

【治療】

早めにウイルスを抑制する薬で治療することが効果的です。できれば発疹が出てから３日以内に抗ウイルス薬を始めることが望ましいとされています。通常、内服薬を７日間服用しますが、重症の場合には入院して点滴治療が必要となります。痛みには鎮痛剤が処方されます。

体の免疫力を回復させるために安静にすることも大切な治療の一つです。１週間は家事や仕事をできる範囲でセーブして体を休めてください。大人から大人へうつることはありませんが、小さいお子さんにはみずぼうそうとしてうつることがあるので、入浴を別にするなどの配慮が必要です。

【予防（免疫を下げないこと、ワクチン接種など）】

免疫が下がると発症しやすくなるため、健康的な食事や十分な睡眠を取り、適度な運動をすることで免疫力を高めることが予防になります。最近では、50歳以上の方を対象とした帯状疱疹ワクチンもあります。ワクチンを接種することで、発症率が抑えられるだけでなく、もし発症してしまっても重症化しにくくなる、痛みが残りにくくなるなどの効果が期待できます。

当院では、帯状疱疹のワクチンを採用しています。ご希望がございましたら受付までご相談ください。

オンライン面会を行っています。

予約制となっておりますのでご希望の方は
公立世羅中央病院　☎０８４７－２２－１１２７へお問い合わせください。